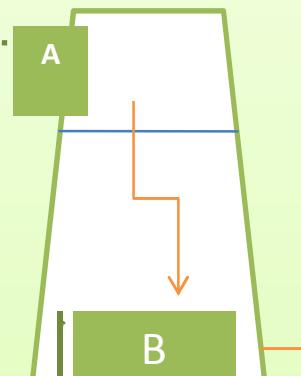


《日本的精神主義構圖》

$A \rightarrow B \rightarrow C'' = C2$ (西歐概念の後楯化現象)

◎C2:後楯・護符(西歐概念=上位概念)

絶對的自己肯定



「進歩・自由」(西歐的概念・新漢語)への適應異常…教育・西歐自然主義文學・戀愛等に對してと同一的「適應異常」現象と言ふ事では。そして、その原因として擧げられる事は以下の日本人の精神構造の特質である。

* 彼我の差を辨へず「自他未分の神道的生活態度で何にでもべたべた引つ付く」。それが禍し、實證精神によつての「テキストP8圖」化(「神に型どれる人間の概念の探究」)が叶はず、「テキストP9圖」に停留してしまふ。その結果「西歐的概念」は、「絶對的自己肯定」の爲の肯定因、即ち「C2:護符・後楯」としての上位概念(世界・社會・階級、大思想)へと變質しまふ。以下參照。(參照:左欄圖)

[拙發表文:『日本の知識階級』より抜粋]

恒存は、「日本の知識階級は言はば絶對的自己肯定者(C''自己主人公化)として終始してきた」と看破し、「私小説家・近代日本知識人、その典型としての清水幾太郎」の三者を、いざれもパターンは「テキストP9」の「日本精神主義構圖」だと言つてゐる。即ち以下の様に。

「現實(A)的不滿⇒B:逃げ處としての個人的自我概念⇒C''自己主人公化(自己完成:絶對的自己肯定)↔「詩神・護符・後ろ楯の思想:C2」⇒自己満足・自己正當化(似非生き甲斐・似非實在感)」(參照:左欄圖)

そして、彼等「絶對的自己肯定者はあらゆるものを自己の手中に收めようとして(權力慾)、その結果、自己の不滿(A:現實的不滿)を處理する能力だけを失つた人間である。(中略)不滿の原因は現實といふ客觀的對象のうちにのみあるのではないのに、彼等はそれをそこ(A的不滿)にのみ見出さうとする。いや、さうする以外に能力も無く、方法も知らぬのであります」(『日本の知識階級』全5P369)。と、上記三者を當該評論で鋭く指摘してゐるのである。

そして彼等は「絶對的自己肯定」の爲に、その肯定因として「C2:護符・後楯」を上位概念「世界・社會・階級、大思想」に求めようとする。何故ならば、西歐近代が否定因としての神を背景に持つに對して、前近代日本はそれを持たない。故に後楯による自己欺瞞が可能になるのである、と恒存は指摘するのである。